

## 6月号 病虫害防除

梅雨時期は、特に露地栽培の果樹にとって病害が発生しやすい時期です。降雨や圃地の状況を把握して防除対策を徹底してください。また、昨年度果実腐敗が多発したことから、収穫期を迎えているハウスミカンではアザミウマ類や果実腐敗対策をしっかり行いましょう。

### <露地カンキツ>

#### ○黒点病

樹上の枯れ枝や園内に放置されたせん定枝は黒点病の重要な伝染源になりますので、必ず除去して処分してください。また、園内に残った切り株は抜根するか、肥料袋などで全体を覆って病原菌の胞子が飛散するのを防いでください。

マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）単用で防除する場合は、薬剤散布後の累積降雨量が 200～250mm または薬剤散布 1 か月後を目安に再散布を行ってください。なお、本剤にマシン油乳剤を加えると残効が長くなり、次回の薬剤散布時期は累積降雨量 350～400mm を目安にすることができます。ただし、マシン油乳剤を加用して散布した後 2～3 日以内に降雨があると、薬剤が流れやすくなり、有効成分の付着量が少なくなる可能性がありますので、散布後の天気予報にも注意して散布計画を立ててください。マシン油乳剤の濃度は、ミカンハダニの発生が認められる場合は 200 倍、ミカンハダニの発生が認められない場合は 400 倍とします。防除時期の目安となる累積降雨量は、圃場内に簡易雨量計を設置して確認しましょう。なお、マシン油乳剤の使用は 6 月下旬までとします。

#### ○かいよう病

昨年は秋期に台風の襲来があり、本病の発生が多い圃場があることから、今年は平年よりかいよう病の菌密度が高いと予想されます。

カンキツかいよう病が問題となる園（ネーブル、いよかん、はるみ等の中晩柑、高糖系温州が植栽された園、幼木園、高接園、風当たりが強い園等）では、6 月中旬にクレフノン 200 倍加用コサイド 3000 の 2,000 倍またはクレフノン 200 倍加用フジドー L フロアブル 1,000 倍の散布を徹底して下さい。

#### ○ミカンサビダニ

葉上で増えたミカンサビダニが果実へ移動を始める時期となります。果実被害を防ぐため、6 月上旬からの防除を徹底しましょう。

チャノキイロアザミウマの防除も兼ねて、コテツフロアブル 4,000 倍、マッチ乳剤 3,000 倍、ハチハチフロアブル 2,000 倍等を散布します。ミカンサビダニのみを対象とする場合は、サンマイト水和剤 3,000 倍かダニカット乳剤 20 の 1,000 倍を散布します。なお、サンマイト水和剤にマシン油乳剤を加用すると効果が低下しますので、加用しないようにして下さい。

#### ○チャノキイロアザミウマ

6 月はチャノキイロアザミウマによるカンキツの前期被害を抑える上で重要な防除時期です。近年、気温上昇等の影響により、チャノキイロアザミウマの発生時期が早くなる傾向にあるため、写真 1 のような前期被害の発生が多い園では 6 月初め頃の防除を徹底してください。



写真1 チャノキイロアザミウマによる果梗部の前期被害

#### ○カイガラムシ類

5月下旬から7月頃までは、カイガラムシ類の幼虫発生時期であり、特に6月上中旬は重要な防除時期となります。

フジコナカイガラムシが発生している圃場では、チャノキイロアザミウマやゴマダラカミキリの防除も兼ねて、モスピランSL液剤2,000倍を散布して下さい。フジコナカイガラムシは、葉や果実の重なったところなどの薬剤のかかりにくいところに寄生することが多いので、むらが無いように丁寧に薬剤を散布しましょう。

ヤノネカイガラムシやナシマルカイガラムシ、アカマルカイガラムシが発生している場合は、スプラサイド乳剤40の1,500倍またはエルサン乳剤1,000倍等で対応します。

#### <ハウスミカン>

##### ○アザミウマ類

アザミウマ類の加害による果実被害を抑えるためには、まずは園内への虫の侵入を防止することが重要です。園内外の除草を徹底するとともに、ハウスサイドにアルミ蒸着シートや光反射シート織込ネットを設置し、ハウス内へのアザミウマ類の侵入を防ぎましょう。

収穫時期が近い園で薬剤散布を行う場合は、薬剤の使用基準（収穫前日数）に注意します。また、アザミウマの種類によって効果の高い薬剤が異なりますので、表1を参考に薬剤を選択してください。

表1 ハウスミカンのアザミウマ類防除薬剤

| アザミウマの種類                 | 薬剤名                   | IRAC <sup>※1</sup><br>コード | 希釈倍率    | 収穫前日数  | 本剤の<br>使用回数 |
|--------------------------|-----------------------|---------------------------|---------|--------|-------------|
| ミカンキイロアザミウマ<br>及びネギアザミウマ | ファインセーブフロアブル          | —                         | 2,000倍  | 7日前まで  | 2回以内        |
|                          | ディアナWDG               | 5                         | 10,000倍 | 前日まで   | 2回以内        |
|                          | スピノエースフロアブル           | 5                         | 4,000倍  | 7日前まで  | 2回以内        |
| ミカンキイロアザミウマ              | ウララ50DF <sup>※2</sup> | 29                        | 5,000倍  | 7日前まで  | 2回以内        |
|                          | ダーズバンDF <sup>※3</sup> | 1B                        | 3,000倍  | 14日前まで | 2回以内        |
|                          | コテツフロアブル              | 13                        | 2,000倍  | 前日まで   | 2回以内        |
| ネギアザミウマ                  | ハチハチフロアブル             | 21A                       | 2,000倍  | 前日まで   | 2回以内        |

※1 殺虫剤抵抗性対策委員会(IRAC)が定めた作用機構に基づく分類コード

(「—」はコード未設定のもの)

※2 「みかん」で登録有り

※3 「みかん(施設栽培)」で登録有り

#### ○果実腐敗防止対策

果実腐敗は、果実表面の傷から病原菌が侵入・感染して発生します。一見健全そうに見える果実でも、果皮の細かい傷などから腐敗へつながる可能性がありますので、防除や選別等の対策をしっかり行いましょう。

まず、アザミウマ類の食害も腐敗につながりますので、先述のように防除を徹底します。

次に、薬剤防除は、収穫の7～10日前にベンレート水和剤4,000倍またはトップジンM水和剤2,000倍のいずれかとベフラン液剤25の2,000倍を必ず混用して散布してください。薬液が霧状に出るノズルで、果実1つ1つを薬液で包み込むようにムラなく散布することが重要です。

最後に、収穫の際にハサミ傷をつけないことや、収穫果実を丁寧に扱うことが重要です。傷果は、収穫物に混入させないように注意します。樹上の果実や地上に落ちた果実に緑かび病が発生している場合は、そのまま放置していると菌が飛散し園中に蔓延してしまうため、園外へ持ち出し、適切に処分してください。

#### <ナシ>

##### ○黒星病

葉や果実が発生した黒星病は、周囲への伝染源となります。発病部位は必ず除去して園外で処分してください。6月中旬頃まではキノンドーフロアブル1,000倍またはフロンサイドSC2,000倍等で輪紋病と同時防除します。6月下旬は収穫期に発生する黒星病の発病を抑えるうえで非常に重要な時期ですので、発生の有無にかかわらずスコア顆粒水和剤2,000倍等のDMI剤をムラのないように散布しましょう。



写真2 果実（幼果）に発生したナシ黒星病

○ニセナシサビダニ

6月は増殖時期にあたりますので、ダニトロンフロアブル 2,000 倍またはハチハチフロアブル 2,000 倍等を散布して下さい。

<ブドウ>

○袋かけ前の防除

べと病対策としては、5月号にも記載したとおり、果実小豆大頃までにリドミルゴールド MZ 等を散布して対応して下さい。

晩腐病対策として、ベンレート水和剤 2,000 倍等を散布します。また、チャノキイロアザミウマ対策として、アディオンフロアブル 1,500 倍を散布します。

○袋かけの注意点

摘粒後はできるだけ早く袋かけを行いましょう。ただし、降雨後など果房が濡れた状態で袋かけを行うと晩腐病の感染を助長しますので、果房が乾いてから袋かけ作業を行ってください。また、袋の止め口が緩いと雨滴とともに病原菌が袋内に流入しますので、止め口はしっかりと締めてください。止め口をきつく締めた場合でも、上の方が緩く、漏斗状（逆三角形）になっていると水滴が溜まり袋内に流入しますので針金を止め口の上部まで回して漏斗状（逆三角形）にならないように注意してください。

○袋かけ後の防除

袋かけ直後に、チャノキイロアザミウマ、枝膨病、べと病対策として薬剤防除を行います。チャノキイロアザミウマにはダントツ水溶剤 4,000 倍、アルバリン（スタークル）顆粒水溶剤 1,000 倍等のいずれかの薬剤を散布します。枝膨病には、ストロビードライフロアブル 2,000 倍を散布します。べと病には、袋掛け後はボルドー液（I C ボルドー48Q、66D）50 倍を散布してください。なお、I C ボルドーにアビオン-E 1,000 倍を加用すると防除効果が向上します。

<カキ>

○炭そ病

梅雨期は主要な感染時期です。ジマンダイセン水和剤 500 倍を散布し、その後の累積降雨量が 150～200mm となればジマンダイセン水和剤やエムダイファー水和剤等の薬剤を再散布します。なお、マンゼブを含む農薬（ジマンダイセン水和剤やペンコゼブ水和剤）の総使用回数は 2 回なので、総使用回数を超えないように注意してください。散布ムラが無いように、樹の上部にもたっぷり散布することを心がけましょう。

○害虫対策

6月中旬頃はカキノヘタムシガやフジコナカイガラムシの重要な防除時期です。スミチオン水和剤 40 の 1,000 倍等を十分量丁寧に散布してください。

<キウイフルーツ>

○すす斑病

6月は葉・果実への感染防止の重要な時期です。この時期の防除が不十分な場合、後々果実で多発するので、ベンレート水和剤 2,000 倍またはストロビードライフロアブル 2,000 倍等を果実だけでなく葉の表裏、棚面の上の方にある枝先にも薬液が付着するように丁寧に散布してください。枝が遅くまで伸びているような樹で発生が多くなるため、適切な新梢管理を行ってください。

※キウイフルーツは品種によって使用できる薬剤に制限があるため、暦や指導に従って薬剤を選択してください。